

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 登録実用新案公報 (U)

(11) 実用新案登録番号
実用新案登録第3201105号
(U3201105)

(45) 発行日 平成27年11月19日 (2015.11.19)

(24) 登録日 平成27年10月28日 (2015.10.28)

(51) Int.Cl. F 1
A 2 2 C 25/14 (2006.01) A 2 2 C 25/14

評価書の請求 未請求 請求項の数 4 O L (全 6 頁)

(21) 出願番号 実願2015-4581 (U2015-4581)
(22) 出願日 平成27年9月9日 (2015.9.9)(73) 実用新案権者 515248067
以後 昌宏
兵庫県姫路市宮上町 1 丁目 1 1 6 - 3
(74) 代理人 100178102
弁理士 橋本 晃
(72) 考案者 以後 昌宏
兵庫県姫路市宮上町 1 丁目 1 1 6 - 3

(54) 【考案の名称】 魚用内蔵除去具

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】魚体内で変形しない強度を有し、確実に内臓を引き出すことができる、使い勝手の良い魚用内蔵除去具を提供する。

【解決手段】一対の棒状部材A、Bよりなり、一対の棒状部材A、Bを魚の口から魚体内に挿入して内臓を挟み引き出す構成をとる。棒状部材A、Bは先端部1・中間部2・グリップ部3から成り、先端部1には複数の溝11が形成され、複数の溝11に内臓が引っ掛かり、容易に内臓を挟み引き出すことが可能である。棒状部材A、Bは金属製の角棒であって、作業中に曲がったり折れたりすることがない。また、グリップ部3に樹脂製のチューブ33が被着されており、作業者が本除去具を握りやすい構成としている。さらに、グリップ部3端部に懸架用尻手ロープ34が設置されており、懸架による保管が可能となっている。

【選択図】 図 1



【実用新案登録請求の範囲】**【請求項 1】**

一対の棒状部材より成る魚用内蔵除去具であって該棒状部材は、
複数の溝が形成された先端部と、
前記先端部から連続する中間部と、
前記中間部から連続するグリップ部と、
から成り、前記一対の棒状部材を魚の口から魚体内に挿入し、内臓を挟み引き出すことを特徴とする魚用内蔵除去具。

【請求項 2】

前記棒状部材は金属製の角棒であることを特徴とする請求項 1 記載の魚用内蔵除去具。

10

【請求項 3】

前記グリップ部は樹脂製のチューブが被着されていることを特徴とする請求項 1 又は 2 記載の魚用内蔵除去具。

【請求項 4】

前記グリップ部の端部には懸架用尻手ロープが設置されていることを特徴とする請求項 1 乃至 3 のいずれかに記載の魚用内蔵除去具。

【考案の詳細な説明】**【技術分野】****【0001】**

本考案は、魚のえら、ワタ等の内蔵を除去するための用具に関する。

20

【背景技術】**【0002】**

魚のえら、ワタ等の内蔵（以降、単に「内臓」という。）を除去するには、包丁等の刃物を使用して切除するほか、従来より、割り箸もしくは菜箸などを魚の口から挿入し内臓を引き出す方法がとられている。また、近年は、トング仕様のステンレス製内蔵除去具（図 4）が市販されている。

【考案の概要】**【考案が解決しようとする課題】****【0003】**

包丁等の刃物を使用して魚の内蔵を除去する場合は、まな板等の台が必要となるうえ、指を創傷する危険を伴う。また、割り箸等を魚体の口から挿入して内臓等を挟み出す方法は、対象の魚によっては箸がすぐに折れてしまうことが多い。

30

【0004】

上述の問題を踏まえて現在市販されている前記ステンレス製内蔵除去具は、図 4 に示すように素材が薄く硬度に欠けるため、魚体内で棒部が湾曲してしまうことが多いうえ、棒部に設けられた溝が内臓を引っ掛けるのに十分な深さを有さないために滑ってしまい、繰り返し作業をしても目的を果たせないことが多い。

【0005】

これらの問題に鑑み、本考案においては、魚体内で変形しない強度を有し、確実に内臓を引き出すことができる、使い勝手の良い魚用内蔵除去具を提供することを課題とする。

40

【課題を解決するための手段】**【0006】**

上記課題を解決するために、請求項 1 の魚用内蔵除去具は、一対の棒状部材よりなり、前記一対の棒状部材を魚の口から魚体内に挿入して内臓を挟み引き出す構成となっている。該棒状部材は先端部・中間部・グリップ部から成り、前記先端部には複数の溝が形成され、該複数の溝に内臓が引っ掛かり、容易に内臓を引き出すことが可能であることを特徴とする。

【0007】

請求項 2 の魚用内蔵除去具は、前記棒状部材は金属製の角棒であって、作業中に折れたり曲がったりすることがないことを特徴とする。

50

【0008】

請求項3の魚用内蔵除去具は、グリップ部に樹脂製のチューブが被着されており、作業者が本除去具を握りやすい構成としていることを特徴とする。

【0009】

請求項4の魚用内蔵除去具は、グリップ部端部に懸架用尻手ロープが設置されており、懸架による保管が可能となっていることを特徴とする。

【考案の効果】

【0010】

本考案により、包丁やまな板を使用せずに魚の内臓を除去することが可能となる。

【0011】

先端部に複数の溝が形成された棒状部材により、内臓を確実に挟み引き出すことができる。また、金属製の角棒を使用しているため、折れたり変形したりする心配がない。

【0012】

グリップ部に樹脂製のチューブを被着させ、手が滑ることなく作業を行うことができる。さらに、グリップ部端部に懸架用尻手ロープが設置されているものについては、台所等における懸架による保管が可能となる。

【図面の簡単な説明】

【0013】

【図1】本実施形態の魚用内蔵除去具の写真である。

【図2】本実施形態の魚用内蔵除去具を魚体の口から挿入した状態の写真である。

【図3】本実施形態の魚用内蔵除去具により内臓が引き出された状態の写真である。

【図4】現在市販されている代表的な魚用内蔵除去具の写真である。

【考案を実施するための形態】

【0014】

本考案の1実施形態について図を用いて説明する。本実施形態に係る魚用内蔵除去具は、請求項4に記載の魚用内蔵除去具である（以降、単に「本具」と記する）。

【0015】

図1に示すように、本具は一对の棒状部材A・Bにより構成される。素材は市販されているもの（図4）と同様、防錆材としてステンレスを用いているが、市販のものが薄い板状であるのに対し、本具は4mm角の頑強な角棒となっている。長さは約300mmまでの魚体に対応できるように、200mmのものと250mmのものが用意されている。

【0016】

本具を構成する棒状部材A・Bは、各々が先端部1、中間部2及びグリップ部3の各領域を有し（図1）、魚の口から魚体内に挿入し（図2）、内臓を挟み引き出す（図3）構成となっている。挿入時にワタまで達する先端部1には、十分な深さと鋭いエッジを有する7つの溝11が短手方向に形成されており（図1）、溝11により魚体内で確実にワタやえら等を引っ掛け挟んで口から引き出すことを可能としている（図3）。

【0017】

また、グリップ部3には、強度及び耐水性に優れる樹脂製の収縮チューブ33が被着されており、滑らず確実な握り手を実現している。さらに、グリップ部3の端部には懸架用の尻手ロープ34が設置されており、台所等に懸架しての保管が可能となっている。

【0018】

以上、本考案の有する特徴及び優れた点を上記実施形態に記載したが、本考案は、本考案の原理の範囲内で、本願の実用新案登録請求の範囲で使用されている言葉を広く一般的な意味にまで広げて実施することが可能である。例えば、請求項1の内蔵除去具にあっては、棒状部材として曲面を有する棒を用いたり、セラミックス等の素材を使用することも可能である。また、溝についても本実施形態とは異なる形状・数の溝を形成することも可能であり、それらについての本実施形態と異なる形態による実施は、本考案の技術的範囲に含まれるものと解する。

【符号の説明】

10

20

30

40

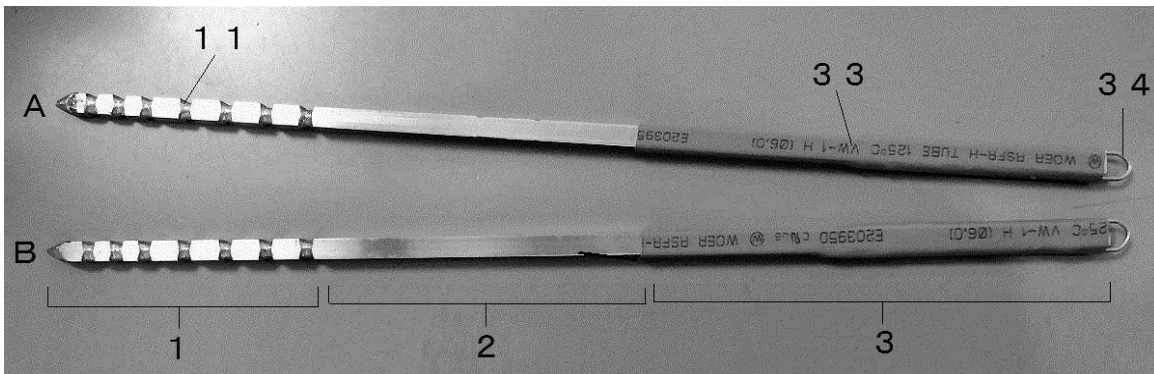
50

【 0 0 1 9 】

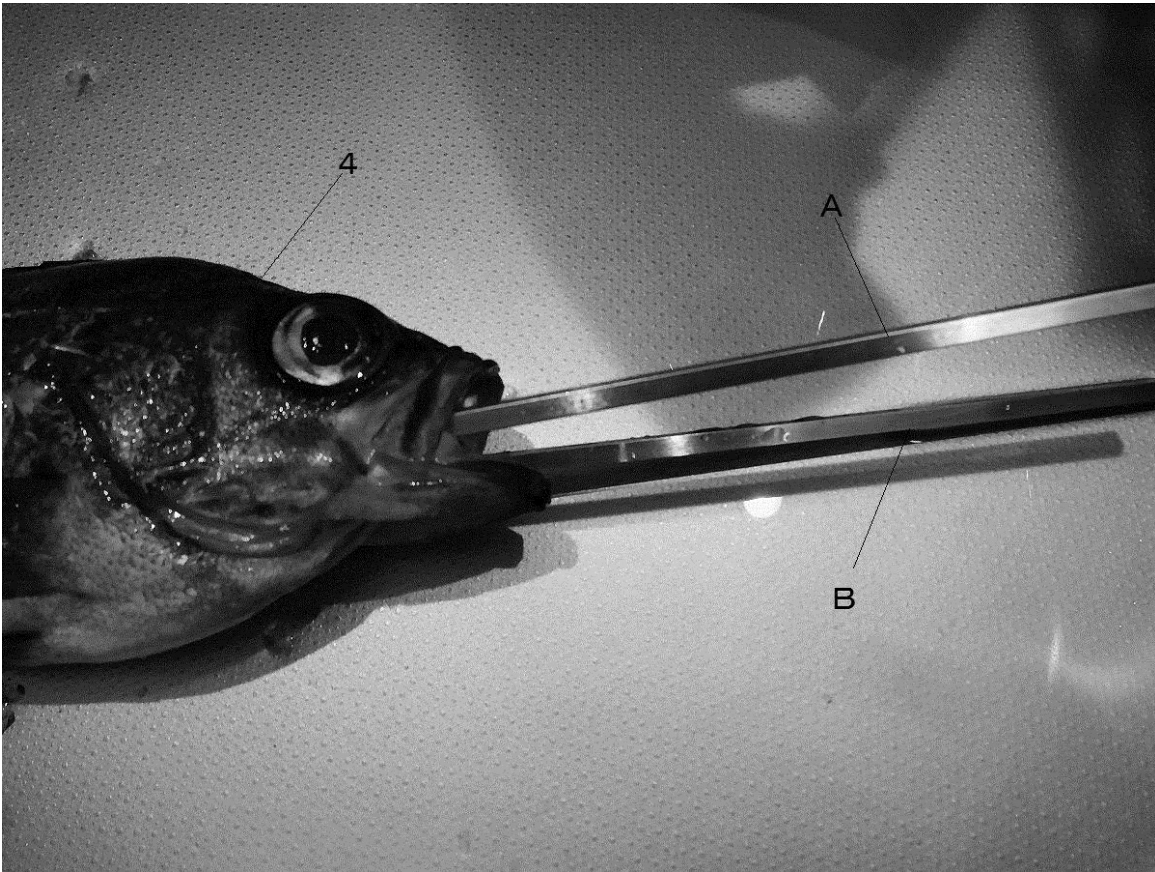
- A 棒状部材（内蔵除去具）
- B 棒状部材（内蔵除去具）
- 1 先端部
- 1 1 溝
- 2 中間部
- 3 グリップ部
- 3 3 チューブ
- 3 4 懸架用尻手ロープ
- 4 魚体
- 4 1 内臓
- 5 市販の内蔵除去具
- 5 1 溝

10

【 図 1 】



【図 2】



【図 3】



【図 4】

